

ミステリ読書案内

2024. 4. 16 発行元

第567号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

佐々木譲「警官の酒場」

2月に角川春樹事務所から佐々木譲の『道警シリーズ』の最新作『警官の酒場』が出た。これまで高レベルで充実した内容を維持してきているシリーズなのでその出来には大いに期待が膨らむというものだ。

日常の警察の活動の中から

雑誌『ランティエ』に連載されたものが単行本になった。以前にも書いたが、このシリーズはシューヴァル&ヴァールーの『マルティン・ベッグ・シリーズ』も念頭に置きながら作られてきたもの。警察官の佐伯、小島だけでなく、北海道警札幌方面大通警察署を中心にした日常の警察の動きを土台にして物語が作られている。

特定の人物や特定の事件だけにスポットライトが当てられているわけではなく、その時期の社会全体の様子が捜査活動を通して伝わるようにと心がけた作品だ。

捜査の第一線から外された佐伯たち

かつて上司の指示に従わず、道警の秘密を公にしたために捜査の第一線から外されてしまった佐伯たち。でも辞職することなく地道な日々の活動に取り組む。

今回は闇バイト絡みの集団が牧

場宅を急襲して多額のお金を強奪する事件が中心になるけれども、佐伯、小島、津久井はそれぞれの持ち場での動きをこなしている。佐伯は自動車窃盗事件。小島は繁華街でスマホを奪われた女子高生の対応。津久井はナイフを持った男の人質立て籠もり事件。

それぞれの事件はまもなく解決したように思えるのだが…。何かしらのひっかかりの疑問点が後に残り…。それが物語の後半になって強奪事件に収束していく形になる。この辺の構成が非常に上手だ。

「警官の酒場」の意味は…

題名の『警官の酒場』は、今までのシリーズ題名からすると平凡すぎるような印象を受けるのだが、実はここにも大きな意図が隠されている。「警察官」の宿命とも言うべきもの。危険と隣り合わせ…。

警察組織内でも敵ばかりだったのが、時間の経過とともに少しずつ協力が得られるようになり…。佐伯

佐々木譲の『道警シリーズ』

1. 笑う警官
2. 警察庁から来た男
3. 警官の紋章
4. 巡査の休日
5. 密売人
6. 人質
7. 憂いなき街
8. 真夏の雷管
9. 雪に撃つ
10. 樹林の檻
11. 警官の酒場

現在は、『樹林の檻』と本書『警官の酒場』以外は、いずれもハルキ文庫に入っており、切らずに版を重ねているので、どこの書店でも手に入れやすい。

も次の一步を踏み出そうか迷う段階に来ている。

今後「道警シリーズ」はどうなるのか？

本の帯には「第一シーズン完！」と書いてある。振り返れば、ずいぶん長い「シーズン」だったと思う。果たして「第二シーズン」はどのように？？ 楽しみである。登場人物のそれぞれが新しい立場になりスタートを切っていく話になるのだろうか…。作者の佐々木譲は私より少し年齢は上だけれども、まだまだ作品を書き続けられるはず。今から「第二シーズン」が待ち遠しい。

渡辺裕之「波濤の檻 オッドアイ」

2月に中央公論新社から出た本。『オッドアイ・シリーズ』の11作目になる。シリーズが進むにつれて他シリーズとの重なりが増えてきて、本書では『傭兵代理店』の柘真、『冷たい狂犬』の影山などが途中から加わり、協力して作戦に取り組む。

今回はジブチ、イエメン、ソマリランドなどアラビア海、紅海周辺が舞台になる。現実の世界で、ハマスによる攻撃からイスラエルがパレスチナのガザ地域に侵攻を開始し、先が見えない状況に陥っているまさにその場所である。本書の中でもイエメンの一部地域を支配するフーシ派が朝倉を人質として捕らえる場面が登場する。ロシア、中国、アメリカ…各国の思惑が交錯する複雑な情勢を踏まえてのストーリー。朝倉が副局長を務める警視庁の特別強行捜査局の問題が週刊誌のゴシップ記事によって国会で取り上げられるようになり、急遽朝倉は海上自衛隊の護衛艦しおなみに乗り、ジブチを拠点とする海賊対処行動作戦に参加することになる。八ヶ月間日本を離れ、ほとぼりを覚ます期間を取ろうという上層部の判断。現地に到着して、艦から下りてジブチ国際空港の端にある警務隊本部に挨拶した後の帰途に怪しい集団に襲われることになる。朝倉を目当てにしてある国の謀策が組まれていたのだ。ここから朝倉の必死の苦闘が開始される。敵の目を欺き、なんとか脱出を試みる。同時に、朝倉の行方不明を知った傭兵代理店のメンバーが動き出し、アフリカで別の依頼をこなしていた影山などに奪還の指令が発せられる。今回は国内の「警察」としての動きはほとんどない。